

## 恋と歌の別れ

辻 憲男（文学部教授）

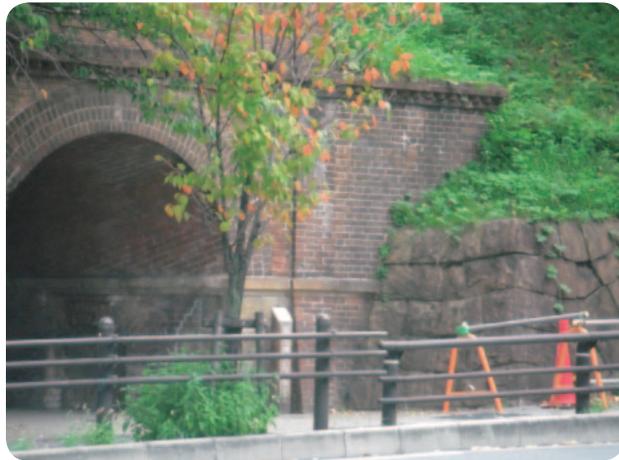
明治33年（1900）11月5日、登美子、晶子と鉄幹は京都永観堂の紅葉を見物した。「燃えるような盛りの紅葉が夕日に映じ、その日ごろ、その時刻、楓を主としたこの霜葉を見るに最もふさわしい時に三人は来たのであった」。帰宅の時間を気にする晶子を登美子が説得した。粟田山麓の辻野旅館に泊まった。「まるでおちぶれた飄泊の三人兄妹ね」と、もう度胸を据えた晶子が言った。秋の夜長、まず鉄幹が妻との係争の話をした。晶子は心中ひそかに、「いろんな事を云って、この人はふたりの気を引いてみているのだ」と思った。それから登美子が若狭へ追いつ返される身の上を嘆いた。「今夜が先生やお姉さまとのお別ればかりか、詩歌との別れの切なさです」と、倒れ伏して声を放って咽び泣いた。夜中、女二人ひそひそと語り合った。晶子は友の足の異常な冷たさをあわれんだ。木枯らしが吹いた。

佐藤春夫作『晶子曼陀羅』の、文学史上名高い一夜の章。晶子は雑誌「明星」に、

三人（みたり）をば世にうらぶれしはらからとわれまづ云ひぬ西の京の宿  
人の世に才秀でたるわが友の名の末かなし今日秋くれぬ

友のあしをつめたかりきと旅の朝わかきわが師に心なく云ひぬ

の歌を載せた。小説はこれらを材料にした。人物の心の中まで想像するのは小説家の特権である。登美子の足の冷たさはまさしく恋と歌を失った傷心。されば詩心優しき文豪は、小説には、このことを翌朝晶子が鉄幹に告げたと書かぬことにした。



琵琶湖疎水は1890年竣工。東山区蹴上に  
遺る鉄路・インクライン下のトンネル。